

第二回 「教育」には始めと終わりがあ

「教育」と「学習」の違いをめぐって様々な議論があることは前号で述べた。少なくとも二〇世紀初頭までは「教育はおとなと子どもとの関係」によって成り立つものとする思想が大勢を占めていた。あたりまえだが子どもは必ず「おとな」になる存在だから、「教育」には「終わり」があるもの、ということになる。プラトンはすでに人の一生を通じて持続するものを「陶冶」*bildung*、いつの日か必ず終わりになるものを「教育」*erziehung*、と考えていたようだが、それ以外にもカントは、

「教育はその位の期間継続されるべきものでしょうか。それは、自然自身が人間に自分自身を導くように想定している時期まで、性への本能が人間の中に発達する時期まで、自分が父親になることができ、そして子どもを教育しなければならなくなる時期まで、つまりおよそ十六歳の頃までであります。『教育学講義』(一八〇三)

と述べている。このような「教育とはおとなになるまでのもの」という考えは教育に対する伝統的な認識であった。つまり「生涯教育」という言葉自体が矛盾なのである。他方で、『学習』はいいけど「教育」はちよつとネエ……、と思う人も多いのではないか。この思いの根底には、「教育」という言葉の持つ・統制のにおいに対する反発がうかがえる。「一八歳の選別がさらに先まで延長されて、一生教育による優勝劣敗が続くとすれば、これはゆゆしき問題だ」という批判もある。そしてこの『教育』の統制批判は、特に戦後日本の民主的教育学者の間でもてはやされた論調でもあった。

かくて、われわれは生涯教育が組織されるに従って、教育の自由、国民個人の思想の自由をあらだめてみつめなおさなければならなくなっている。情報化社会はシステム社会・管理社会であり、そこでは知的生産が情報として外化されるとともにそのような情報はそこにおける主導勢力、国家家独占資本によって掌握され操作される。だから情報管理社会においては、資本は近代的「教育の自由」の体制を前提としながらもそれを体制内化することによって教育をトータルに支配する。『持田栄一 生涯教育論 その構想と批判』(一九七二)

難解な文体だが、要約すれば生涯教育体系は教育の国家支配の徹底した形態である、というところだろうか。いったいこの国かと首を傾けたくなるような話だが、こつこつした批判が大真面目に語られ、また驚くべきことにこれらの主張がその後の日本の生涯教育政策に微妙な影響を与え続けているのである。たとえば一九七一年の中教審答申『生涯教育について』では「教育」に代わって「学習」ということがしきりに強調され始めている。世界的にみても一九七六年のユネスコ第一九回総会(ナイロビ)の『成人教育の発展に関する勧告』の草案作成段階では、生涯教育が生涯学習かが問題となり、結局妥協の産物として lifelong education and learning という表現になった。

「生涯教育及び生涯学習」とは、現行の教育制度を再構成すること及び教育制度の範囲外の教育におけるすべての可能性を發展させることの双方を目的とする総合的な体系をいう。(中略)教育及び学習は、就学期間を限られるものではなく(中略)生涯のそれぞれの期間に参加する教育課程及び学習課程は、形態のいかんをとわず、一貫したものと替えられるべきである。(傍線引用者)

「生涯教育」では統制的な感じがするから『生涯学習』という耳ざわりのよい言葉を場当たりに使おうとした雰囲気のある文章である。しかしほんとうに「教育」と「学習」は置換可能な言葉なのだろうか。「生涯学習」はそれほど自由なものなのか、あるいはおとなも「教育の対象」としての側面を持つのではないだろうか、ということをおの問題として考えてみなければならぬように思う。(続)